

**“Toothbrush Ghost Story”を読む**  
**—リチャード・ブローティガンの日本**

A Reading of “Toothbrush Ghost Story”:  
Richard Brautigan’s Japan

奥村直史  
Naofumi OKUMURA

## “Toothbrush Ghost Story”を読む —リチャード・ブローティガンの日本

A Reading of “Toothbrush Ghost Story”:  
Richard Brautigan’s Japan

奥村直史

Naofumi OKUMURA

Richard Brautigan (1935-84) は *Trout Fishing in America* (1967) の作者として知られ、60年代のアメリカではカウンターカルチャーの代表的作家であった。しかしその後、読者からも批評界からも見放された感があり、84年に拳銃自殺で生涯を終えた。“Toothbrush Ghost Story” が収められた *The Tokyo-Montana Express* (1981) の扉には以下の文言が掲げられている。

Though the Tokyo-Montana Express moves at a great speed, there are many stops along the way.  
The book is those brief stations: some confident, others still searching for their identities.

The “I” in this book is the voice of the stations along the tracks of the Tokyo-Montana Express.

この作品を執筆していた当時、ブローティガンはモンタナとサンフランシスコ、そして東京を拠点としていた (藤本 223)。本書は自伝的な短いエピソードで構成されているから、“those brief stations” とはこれらエピソードのことだろう。<sup>1</sup>そして本書に出てくる「わたし」は東京モンタナ急行が停車する「駅の声」だとある。その「わたし」の声を借りてブローティガンがどのような作品を語るのか、停車駅のひとつである “Toothbrush Ghost Story” を考察したい。

*The Tokyo-Montana Express* には東京を舞台とした作品が数多く収められているが、“Toothbrush Ghost Story” は、扉にある “identities” と深く関係すると思われる日本人女性の “identity” を描いている。タイトルに “Ghost Story” とあるのは、ブローティガン同様、日本に深い関心を持った明治期の作家ラフカディオ・ハーンの *Kwaidan: Ghost Stories and Strange Tales of Old Japan* (1904) を念頭に置いたもので、とりわけ “Yuki-Onna” が間テキストとされている。“Yuki-Onna” には日本の昔話の典型である禁止の破りと異類婚が描かれているが、ブローティガンは “Toothbrush” を冠することで物語にブローティガン流のユーモアと現代性を付加している。このユーモアは、さまざまな文学形式と遊ぶことのできる自由さから生まれるため、ブローティガンを文学のカテゴリーで括ることは難しくなる。<sup>2</sup>

“Toothbrush Ghost Story” には一風変わった以下の前書き的なパラグラフが置かれている。

This little story illustrates the sensitivity of Japanese women. It is about a toothbrush and of course there is always the chance that it is not true, that it is just a story somebody made up and if that’s the case, I am sorry I have wasted your time but we will never know if this story is true or not, will we? (86)

「日本人女性の感性」を描くものだとする主題の明示は普通であるが、注目したいのはこの話が「本

当でない可能性」と「誰かがでっち上げた」場合に言及し、その場合には時間の浪費で申し訳ないと謝っている点である。フィクションの読者は、作品とは作家が創造したものであることを前提とする。そこに敢えて言及することが、ブローティガンのユーモアとなる。登場人物＝作者だとする読者は多く、ブローティガンの場合も *Trout Fishing in America* が出版されて以来、そう考えられてきた。しかし、この冒頭の口語的スタイルには、それを批判するアイロニーは読み取れない。さらに注目したいのは「この話が本当なのかそうでないのかは誰にもわかりませんか？」と締めくくっている点である。誰にも分からないことならば、それを気にかける必要はないのではないかというメッセージがここにある。<sup>3</sup> フィクションやノンフィクションというジャンルの枠組みから自由になろうとするのがブローティガンであり、逆に規範のジャンルと遊んでしまおうというのがブローティガンのスタイルである。それは長編小説のサブタイトルにジャンル名を付すことにもうかがい知ることができ、以下がその例である。*The Abortion: An Historical Romance 1966*, *The Hawkline Monster: A Gothic Western*, *Willard and His Bowling Trophies: A perverse Mystery*, *Sombrero Fallout: A Japanese Novel*, *Dreaming of Babylon: A Private Eye Novel 1942*。<sup>4</sup>

以上のことを確認した上で、本編に相当する部分を読んでいきたい。

Once upon a time in Tokyo a young American man and a young Japanese woman met and one thing led to another, like lust, and they became lovers, but she was much more serious about their affair than he was. By this time, a month or so had passed and she had spent many nights at his apartment, leaving in the morning to go home or to work. (86-87)

“Once upon a time” に続き場所が明示される語りははじめは、シンデレラのおとぎ話の典型である。そして主人公は苦難を経たうえでハッピーエンドを迎えるのが典型であるが、“Toothbrush Ghost Story” の結末はハッピーエンドとは対極の別れである。規範の枠組みを利用し逸脱してみせるブローティガンの特徴がここにも認められる。そして東京で若いアメリカ人の男と若い日本人の女が出会うというのも “Boy Meets Girl” という物語の類型だ。“Boy Meets Girl” は紋切り型の恋愛物語であるが、ブローティガンはここでもその逆をいっている。ことの成り行きを「欲望のように」と喩え、ふたりは “lovers” となるのだ。“lovers” に関しては、本気さの度合いが違ふとあるから男にとっては「愛人」女にとっては「恋人」というところだろう。“affair” も「情事」と「恋愛」がそれぞれに相当する。また、アメリカ人の男と日本人の女という設定も昔話によくある異婚譚の類型であるが、それは後に論ずる。

ここで想起しておきたいのはハーンの “Yuki-Onna” だ。人の姿を借りた雪女である O-Yuki は江戸に向かう途中 Minokichi に出会うのだが、ふたりには以下の言葉のやり取りがある。

He asked her whether she was yet betrothed; and she answered, laughingly, that she was free. Then, in her turn, she asked Minokichi whether he was married, or pledged to marry; and he told her that, although he had only a widowed mother to support, the question of an “honorable daughter-in-law” had not yet been considered, as he was very young. . . . After these confidences, they walked on for a long while without speaking; but, as the proverb declares, *Ki ga areba, me mo kuchi hodo ni mono wo iu*: “When the wish is there, the eyes can say as much as the mouth.” By the time they reached the village, they had become very much pleased with each other; and then Minokichi asked O-Yuki to rest awhile at his house. (75)

“Yuki-Onna” のふたりには、無論雪女の作為はあるにせよ、交際相手の有無、家庭の事情などの初々

しい「打ち明け話」がまずあり、互いの気持ちを確認したあとMinokichiの家に入っている。一方、ブローティガンは出会いのあとを“one thing led to another”と極度に要約し、上に見たとおりそれを「欲望」に喩えている。「欲望」のままに関係を進める“Toothbrush Ghost Story”のふたりは囚習の拘束から自由であり、女は出会いから一ヶ月そこそこのうちに彼のアパートで多くの夜を過ごす生活をしている。ここにフリーセックスに代表されるカウンターカルチャーの性質を見ることも可能だ。<sup>5</sup>しかし本作“Yuki-Onna”に対するブローティガンのこのような上書には、「欲望」だけを残した愛の欠如といった現代性を読み取ることもできるが、それは後述する。

次に続くパラグラフでは、ある夜から翌朝にかけての場面がクローズアップされ、タイトルに掲げられた「歯ブラシ」が登場する。

One night she brought her toothbrush with her. She had always used his toothbrush before. She asked if she could leave her toothbrush there. Because she was spending so many nights there, she might as well use her toothbrush instead of his all the time. He said yes and she put her toothbrush beside his in the toothbrush holder. They made love as they usually did, shining brightly with the health of youthful lust. The next morning she happily brushed her teeth with her own toothbrush and went off to her day. (87)

この作品における「歯ブラシ」の役割は、アメリカ人の男の領域に対する日本人の女の侵入を示すものであり、そこから二人の関係に変化が起きる。彼女が持ち込んだ歯ブラシを男がどう感じたかはこの時点では明らかにされていないが、テキストはそれを暗示する。暗示にとどまっているのは、彼女の発話に関する“*She asked if . . . instead of his all the time*”までの部分が間接話法で語られ、地の文に埋められているからだ。直接話法に直すと“*Can I leave my toothbrush here? Because I am spending so many nights here, I might as well use my toothbrush instead of yours all the time.*”となる。これに対する男の応答は“*Yes*”の一語だけである。肯定の一語ではあるが、この寡黙さには否定が響く。彼女の発する“*so many nights*”は第2パラグラフにある“*many nights*”と呼応する。男の寡黙さに比べて彼女の饒舌が目立ち、テキストレベルでは彼女の言葉の多さは愛情量に比例する。

また、間接話法で報告する語り手は決して中立ではなく、男にとって女がどのような存在に映るのかを示しているのだ。幾晩も泊まることと歯ブラシの持ち込みは、彼女との共同生活を予想させるに十分だ。それは“*Once upon a time*”で始まるパラグラフで“*she was much more serious about their affair than he was*”と報告されていたことにも見て取れる。

さらに、語り手は、彼女の様子だけを読者に伝える。次の日の朝、彼女は“*happily*”に自分の歯ブラシで歯を磨き、自分の一日へと出かけていくのだ。しかし、男の様子が語られることはない。際立つ描写はふたりの性交渉で“*shining brightly with the health of youthful lust*”と、「欲望」を極めて肯定的に語っている。語りの視点は明らかに男にあり、彼女が歯ブラシを持ち込む以前について語られた“*like lust*”もここに繋がる。“*lust*”を中心に進む男の生活に歯ブラシに代表される日常生活を彼女は持ち込み「嬉しそうに」している。男の気持ちが語られないゆえに、愛のない男の心情がいつそうくっきりと浮かび上がるのだ。

次のパラグラフでは、歯ブラシホルダーに並べられた二本の歯ブラシの光景が、男にどのように映るかが説明される。時間は継承され、彼女が帰ったあとの場面である。

After she was gone, he thought about their love affair. He liked her but not nearly as much as she liked him. He thought about her bringing her tooth brush to his apartment. He went into the bathroom

and looked at it. The sight of her toothbrush beside his did not please him. Things were starting to get out of control. (87)

語り手は男の内面を直接伝え、視点は男にあることが明らかになる。ここで始めて明示されるのは、男にとってふたりの関係は“love affair”だったことだ。先には“affair”とのみ書かれていたが、男にとっては「情事」だったのである。また、女にとっては“serious”であるとする“lovers”の関係について、男の感情は彼女のものと同等ではないことが示される。さらに、二本並んだ歯ブラシの光景に男は不快であることが語られる。歯ブラシの日常性と、それが同じ容器に並んで置かれていることから、この二本の歯ブラシはそれぞれアメリカ人の男と日本人の女を表していると考えてよいだろう。この光景はふたりの共同生活の象徴となるのだ。男がこの状況をどう考えたかを語っているのが、締めくくりにのように置かれた“Things were starting to get out of control”である。ここに提示されているのは、「欲望」はあるけれども愛の欠如したアメリカ人の男の姿だ。この男は、自分を愛し体の関係も持つ女をも愛することができない。ブローティガンの代表作 *Trout Fishing in America* には現代アメリカにおける「死」と「絶望」を描いた断片が散りばめられているのだが、日本のアパートに住むこの男にもその影が及んでいる。

ここまで、行動するのは常に女のほうであったが、歯ブラシに対しては男が直接単独行動に出る。次のパラグラフを見てみよう。

He took her toothbrush out of the holder and put it in the garbage. Later that day he stopped at a drugstore and bought the cheapest toothbrush that you can buy in Japan. Her toothbrush had been blue. This one was red. He put it beside his toothbrush in the bathroom where hers had been. (87)

二本並んだ歯ブラシの光景が不快であったのだから彼女の歯ブラシを捨ててしまうという男の行動は理解できるのだが、その日のうちに「日本で買える一番安い歯ブラシ」に買い換えているのはどういうことだろうか。歯ブラシの象徴性については先に述べたが、捨てた歯ブラシが彼女だとすれば、男が買いなおしたこの歯ブラシは男と釣り合いがとれる女ということになる。ここで再度、先に触れたこのふたりの愛情のバランス量に関する表現“He liked her but not nearly as much as she liked him.”を考慮すれば、「日本で買える一番安い歯ブラシ」こそが、男にとって釣り合いの取れる女性なのである。ブローティガンは悲しいユーモアを歯ブラシに託してそっと差し出す。歯ブラシの色が青から赤に変わっているのもユーモアだ。“Things were starting to get out of control.”とあったが、色がふたりの関係の進退を表示する。彼女が持ってきた青い歯ブラシは彼女にとっての青信号であり、彼が買い換えた赤い歯ブラシは彼にとっての赤信号なのだ。赤信号ではあるが、彼女を不在にはしておけない男の悲しみがここに見て取れる。

次には 1 行ごとに改行された 5 つのセンテンスと、彼女を待つ男の様子が描かれる。

That evening she came to visit him.

They had a drink and talked for a while.

She was feeling very comfortable.

Then she had to go to the bathroom.

She was gone for ten minutes.

She took more time than she should have taken. He waited. He carefully took a sip of whiskey. He held it in his mouth for a while before he swallowed it. Then he waited. (87-88)

いつもどおりの彼女の様子が報告されるのだが、それを改行して描くことにより、状況を知っている読者には時限爆弾が破裂するのを待つかのような緊迫感が生まれる。彼女は朝出かけ、その間に歯ブラシを捨てられ、それと同じ日にまた男のアパートにやってくるのが男の視点で読者に語られるのだ。酒を飲み話をするのも日常となっているのだろう。「とても快適」と表現される彼女の気分も、歯ブラシを捨てられ交換された事実を知った後との落差を予感させる。そしてトイレに行く必要が生じた彼女は、いよいよバスルームへと向かう。5つ目のセンテンスで、彼女がバスルームに入っているのに割り当てられた「10分」は、事態に気づいた彼女が、それに対してどのような判断を下したらよいのか思い悩む姿を雄弁に語る。

読者は、男と同じ語り手の視点で事の成り行きを見守る。トイレにしては時間がかかりすぎているのだ。男は「注意深く」ウィスキーをすすする。まるで彼女が示すであろう反応が強い酒であるかのように。そして飲み下すのにも時間をかける。男が予期しているのは強烈な彼女の反応なのである。

彼女がバスルームから出てきたところでこの話はクライマックスを迎える。

She came out of the bathroom.

When she went into the bathroom she had been very happy and relaxed. When she came out of the bathroom, she was very quiet and composed. She told him she had forgotten about an appointment she had made that night, and that it was a very important business meeting and she was very sorry but she had to leave immediately. He said that he understood and she thanked him for understanding. (88)

“When”で始まるふたつのセンテンスを並置することで、歯ブラシの一件を知る前と知った後の彼女の様子が際立つように提示される。知る前は“very happy and relaxed”であり、歯ブラシ関連では“she happily brushed her teeth with her own toothbrush”とあったことから、男との関係における彼女の「幸せ」の度合いが読者に伝えられる。しかし、知った後では“very quiet and composed”に変化し、彼女から饒舌さが消える。テクストレベルでの彼女の饒舌さと愛情量の関係については先に述べたが、“very quiet and composed”になることで男と並ぶことになったのであり、それが男の望む女の姿である。

彼女は、喉が焼けるウィスキーのような強烈な反応を示さない。男と交わす最後の言葉も間接話法で報告されるのだが、その内容は歯ブラシを持ち込むこととは対照を成す。彼女は「黙って」身を引くのだ。口実を用い、悲しい感情を見せることはない。これに対する男の応答はごく短く、直接話法に直せば“I understand.”だけであり、語り手もなんら説明を加えない。そしてパラグラフが新たに設けられ、“He never saw her again.” (88)の一文でこの短編は閉じられる。アメリカ人の男が日本人の女の心を“understand”したのか語られることはないが、語り手にはそれが分かっている。冒頭に置かれた“the sensitivity of Japanese women”とは、黙って身を引き最後には感謝の言葉を述べ、その後姿を見せない彼女のこの姿勢を指しているのだ。その語り手“I”とは*The Tokyo-Montana Express*の扉にあったとおり、ここに停車した駅の声であり“identities”を探していた。日本人女性のひとつの“identity”がここに示されたているのである。

最後の一文は“Yuki-Onna”の最後の一文“Never again was she seen.” (77)のバリエーションでもある。これはブローティガンのハーンに対するオマージュというだけでなく、“Yuki-Onna”に見られる昔話の特質を受容している。<sup>6</sup> “Yuki-Onna”では、日本の昔話の特徴である男が女の禁止を犯す型が用いられており、Yuki-OnnaはMinokichiに“You are pretty boy, Minokichi; and I will not hurt you now. But, if you ever tell anybody— even your own mother — about what you have seen this night, I shall know it; and then I will kill you. . . . Remember what I say!” (74)と言って立ち去ったが、Minokichiは結局 O-Yukiにその夜の話を話してしまう。一方、“Toothbrush Ghost Story”では、承諾の破棄という類型が用いられる。男は、彼



女に歯ブラシを持ってきていいかと訊かれ “Yes” と承諾したにもかかわらず、それを捨ててしまい、別の歯ブラシと交換するのだ。

さらに、黙って身を引く女という設定とその「語り方」によりブローティガンは “the sensitivity of Japanese women” を効果的に描き出す。河合隼雄は『昔話と日本人の心』のなかで西洋の物語と日本の物語を比較し、消え去る女性について以下のように述べている。

西洋の物語は、それ自身がひとつの完結された形をもち、その完結性がわれわれの心を打つ。これに対して、わが国の物語は、むしろそれ自身としては完結していないように見えながら、その話によって聞き手が感じる感情を考慮することによってはじめて、ひとつの完成をみるものとなっている。つまり、日本人であるかぎり、黙って消え去ってゆく女性像に対して感じる「あわれ」の感情を抜きにして、この話の全体を論じることにはできないのである。(32)

“Toothbrush Ghost Story” に描かれる日本人女性に日本人の読者は「あわれ」を感じるだろう。<sup>7</sup>それは、彼女がふたりの関係に「真剣」であり、愛情量も男より多く、「多くの夜」を男のアパートで過ごすことが語られたうえ、さらに語りのなかに間接話法で入れられた多くを話す彼女の姿と、「幸せそうに」という様子の報告、これらが黙って立ち去る彼女に対して「あわれ」を感じさせる要因となる。

だが、ブローティガンの “Yuki-Onna” の受容と変容はそれだけにとどまらない。日本人女性に対して与えた語りの情報量に極端な差をつけることにより、多くを語らない寡黙で、欲望はあるのに相手と同じように愛することはできず、それでも孤独ではいられない男の姿に「あわれ」を感じさせている。さらに彼女が男のアパートにやってくることは語られるのに、男が彼女のアパートに行くことがあったのかは語られることはない。彼女には向かうべき場所があったのに、アメリカ人の男には進んで向かうべき場所はない。“Yuki-Onna” は “Never again was she seen.” で終わっていた。消えてしまった “Ghost” をを見つけることはできない。しかし、“Toothbrush Ghost Story” の最後に置かれた “He never saw her again.” は、男の非能動性を伝えている。アメリカ人のこの男の “identity” は、愛の欠如と停滞なのだ。同じ人間であるのに、去る女を追うことのない男、そこにまた「あわれ」を感じさせる。異婚譚である “Yuki-Onna” は “Ghost” の住む異界と人間界の隔たり暗示するのだが、アメリカ人の男と日本人の女というこの類型も、それと同質の隔たりを暗示している。

#### 注

1 Keith Abbottによると、ブローティガンは1977年に日本人女性Akikoと結婚し “Most of the personal, though often solipsistic, stories in *The Tokyo-Montana Express* were written while she was with him” と「自己中心的」な個人の物語はこの結婚中に書かれたとしている (114)。

2 ブローティガン进行分类に入れることは難しいが、Neil Schillerはビートの作家と区別し “microcosmic approach to the concept of moment” ゆえにポストモダンの作家だとしている (221)。

3 ブローティガンが日本の昔話をどのように受容したかについては後に述べるが、鹿児島県黒島の昔話として河合隼雄が『昔話と日本人の心』の扉に載せた以下の語り始めは興味深い。

むかし語ってきかせえ！—

さることのありしかなかりしか知らねども、あった

として聞かねばならぬぞよ—

4 フランスの評論家マルク・シェネティは、ブローティガンのこの試みを「ジャンル戦争」と形容しているという (藤本、210)。*Revenge of the Lawn* 所収の短編 “1/3, 1/3, 1/3” では、登場人物3人が共同で小説をつくる過程が描かれ、結末のセンテンスは3人が “pounding at the gates of American Literature”

(24) とアメリカ文学の扉をたたき描写で終わられ、壮大な「アメリカ文学」のパロディとなっている。  
5 カウンターカルチャーでは、ドラッグ、ロックンロール、セックスが「解放の象徴」となった（ギトリン、307）。

6 ハーンの再話については知られているところだが、妻となった小泉節子が「インフォーマント」となってハーンは日本の昔話を英語で作品とした（平川、44）。

7 モンタナに住むようになった当時、ブローティガンは「アメリカではほとんど問題にされない作家になりつつあった」から（藤本、244）、翻訳も出版され好意的な書評も出る日本の読者を想定していたのかもしれない。

#### 引用文献

Abbott, Keith. *Downstream from Trout Fishing in America: A Memoir of Richard Brautigan*. Vermillion: Astrophil, 2009.

Brautigan, Richard. *Revenge of the Lawn; The Abortion; So the Wind Won't Blow It All Away*. New York: Houghton Mifflin, 1995.

— *The Tokyo-Montana Express*. New York: Dell, 1980.

Hearn, Lafcadio. *Kwaidan: Ghost Stories and Strange Tales of Old Japan*. New York: Dover, 2006.

Schiller, Neil. “The Historical Present: Notions of History, *Time and Cultural Lineage in the Writing of Richard Brautigan*.” Ed. John F. Barber. *Richard Brautigan: Essays on the Writings and Life*. Jefferson: McFarland, 2007.

河合隼雄、『昔話と日本人の心』、東京：岩波、1982。

トッド・ギトリン『60年代アメリカー希望と怒りの日々』、疋田三良・向井俊二 訳、東京：彩流社、1993。

平川祐弘、『小泉八雲とカミガミの世界』、東京：文芸春秋、1988。

藤本和子、『リチャード・ブローティガン』、東京：新潮社、2002。



